

第4章 研究

1 出雲型石棺式石室の成立

岩本 崇

はじめに

出雲型石棺式石室は、古墳時代後・終末期の墓制にみる地域性の実態を論ずるうえでの手がかりとなる考古資料である。そのため出雲型石棺式石室を対象とした分析がもたらす論点は多岐にわたるが、系譜と出現をめぐる議論は新たな葬法を受容した社会背景の解明を可能とする点でこれまでもとくに重要視されてきた。そして、この論点の追究にあたっての起点として位置づけられてきたのが、出雲型石棺式石室の定型化に先立つと評価された古天神古墳の石室である〔赤沢・広江 1987 など〕。

本稿では古天神古墳の石室系譜の解明と出雲型石棺式石室の定型化に至るプロセスの検討を通じて、出雲型石棺式石室の出現背景を再考し、その史的意義に迫る。

(1) 研究史

出雲型石棺式石室の系譜と定型化についての議論は、梅原末治の九州北部との関連とする指摘〔梅原 1918〕をうけた、山本清による実証的な分析にはじまる。山本は、出土した須恵器から石棺式石室の年代を検討するとともに〔山本 1956〕、石棺式石室を特徴づける刳抜玄門の系譜を筑後・肥後といった中九州の横口式家形石棺に求めた〔山本 1964〕。さらに、出雲東部と中九州の相違点から、墓制の受容に出雲東部における地域社会の主体性をみとめた点も注目される場所である。

こうした梅原と山本が提示した論点は、のちに角田徳幸によってさらに深められる。角田は石棺式石室の定型化に先立つ事例として古天神古墳と伊賀見1号墳をあげ、これらの例がもつ諸要素の系譜を明らかにした。具体的には、山本が注目した横口式家形石棺と閉塞石の陽刻に加えて、刳抜玄門をもつ横穴式石室の時期と分布を検討し、その系譜を肥後とくに宇土半島基部を中心とした地域に求めた。中九州と広く系譜を想定した山本の見通しをさらに精緻化して肥後と特定しつつ、出雲型石棺式石室がそれらの諸要素を変容して創出されたとする評価を下したのである〔角田 1993〕。そのうえで、石棺式石室の受容の背景として出雲の主体性を勘案して肥後との首長間関係を想定し、そこに古墳時代後期における倭王権の地方支配強化にたいする在地の対応がうかがわれるとした〔角田 2008・2009〕。石棺式石室の受容時期と系譜を絞り込み、受容の背景を具体的に論じた点が注目される。

先行研究では、出雲型石棺式石室の出現に外的な作用が強いとする点で見解の一致をみる。そこには新たな葬法の成立の画期性を重視する思考をよみとれる。いっぽうで、山本と角田が留意した地域社会の主体性は外的かつ直接的な要因を強調する姿勢とはいささか調和しない。そこに、出雲型石棺式石室の出現を論ずるうえでの別の視角が残されているといえよう。そしてこの視角を追究するには、何よりも出雲型石棺式石室の定型化に先立つと評価される古天神古墳の埋葬施設の特質をあらためて検討する必要があると考える。

さらに、出雲型石棺式石室の出現に関連して、切石石材の横穴式石室への利用はきわめて重要な論点となりうるが、山陰における切石造横穴式石室の出現と展開の背景については現象面としての説明以上の議論がなされていない現状にある。早くに示された出雲東部の石棺式石室が出雲西部や伯耆西

部の横穴式石室に影響を与えたとする山本清の見通しが〔山本 1964〕、そのまま定説として受け入れられたのは古天神古墳の石室への切石技術の導入がもっとも先行すると理解されてきた点にある。しかし、この前提こそあらためて検討しておく必要がある。

本稿では上述した点をふまえ、古天神古墳の埋葬施設を山陰における切石造横穴式石室の出現という視点からとらえなおし、そこから出雲型石棺式石室の成立背景を論ずることとしたい。

（2）石室構造と空間利用からみた古天神古墳の埋葬施設

まずは古天神古墳の埋葬施設（以下、古天神古墳例、他例も○○例と表記）の特質について、石室構造と空間利用に着目して整理しておきたい（第 46 図）。なお、古天神古墳の築造は、石室出土の須恵器から出雲地域の須恵器編年〔大谷 1994〕で出雲 3 期新相～4 期古相〔岩本真 2018〕、そのほかの副葬品から陶器 TK43 型式期新相～TK209 型式期古相に併行する時期と考える〔岩本崇 2018〕。

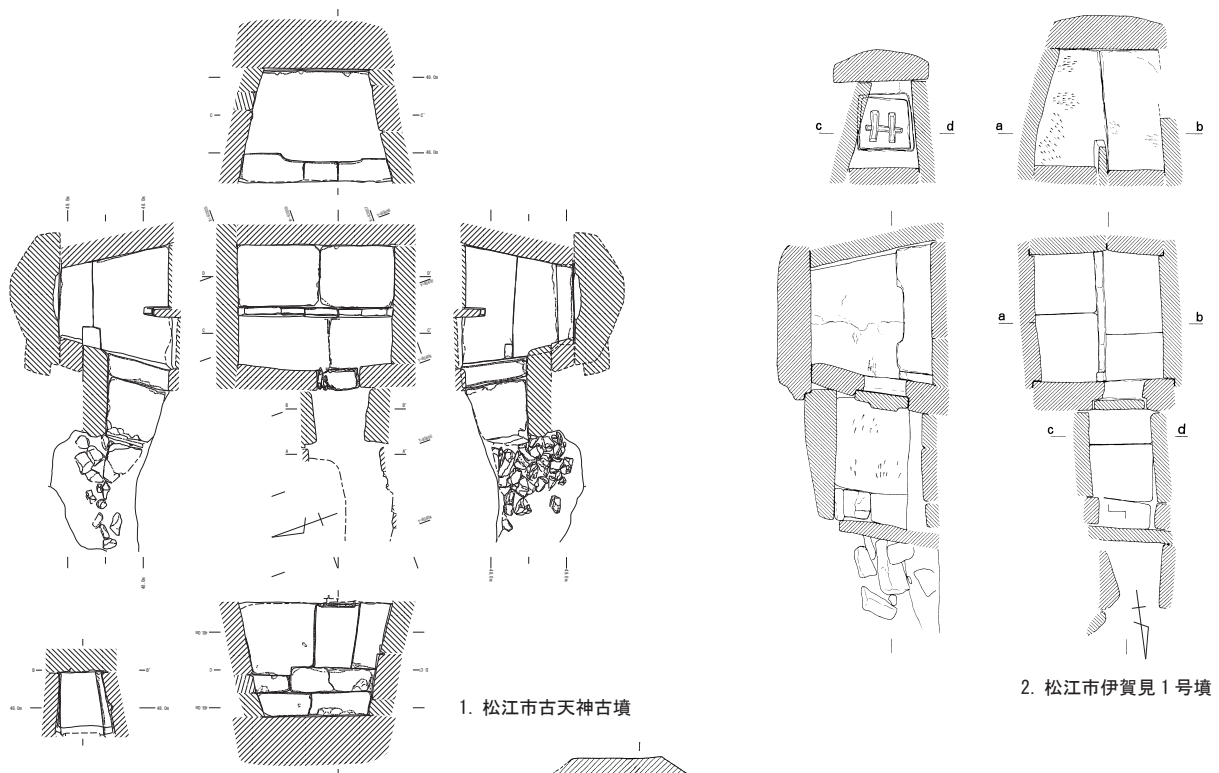
石室構造 古天神古墳例の構造として第一に注目すべきは、奥壁は一枚石ながら両側壁と前壁に石材を 3 段にわたって積み上げる点である。ほかの切石をもちいた出雲型石棺式石室をみても、石材が垂直方法に分割された例は散見されるが、水平方向に分割されないのが通例である⁽¹⁾。とくに、古天神古墳例にみる大型石材を腰石とし、その上部にそれより小型の石材を数段にわたって積み上げる工法は石棺式石室以外の横穴式石室に近く、出雲型石棺式石室の基本構造からはかけ離れたものである。工法という点において、古天神古墳例は出雲型石棺式石室の定型化に先立つものと位置づけられよう。ひるがえって、定型化した出雲型石棺式石室の構造面における要件とは、刳抜玄門をもつことと、それと連動して壁面が一段であることの 2 点に尽きるといえよう。

第二に注目すべきは、後述する石室空間利用ともかかわるが、玄門を構成する前壁石材が羨道天井石と同一であるため、玄門上部の区画が視覚的には目立たない点である。類似した特徴をもつ例としてはほかに朝酌岩屋古墳があるのみである。他方、定型化した石棺式石室では刳抜玄門をもつことから、必然的に前壁上部に羨道天井石をのせることとなり、空間の境界としての玄門が強調される。

石室空間利用 古天神古墳例の空間利用にみる最大の特質は、平入りの玄室を棺と見立てる点にある。それは、主軸直交方向の屍床仕切石を介した奥壁側の空間が天井石の刳り抜き範囲と合致する点から、これを遺体安置空間としたところにも端的にあらわれている。また、石室天井石に縄掛突起を有する点も、家形石棺への指向性の強さを物語る。いうまでもなく、この古天神古墳例にうかがわれる「玄室＝棺」という見立ては、定型化した出雲型石棺式石室と共通する。さらに、この空間利用の発想が出雲東部に分布する平入りの組合式横口家形石棺に求めうる可能性は、その出現時期が古天神古墳にわずかに先行しつつも出雲 3 期にある点〔大谷 1995〕とも調和的である。出雲における平入りの組合式横口家形石棺の出現からさほど時間をおかずに、出雲型石棺式石室が出現したと考えることができよう。

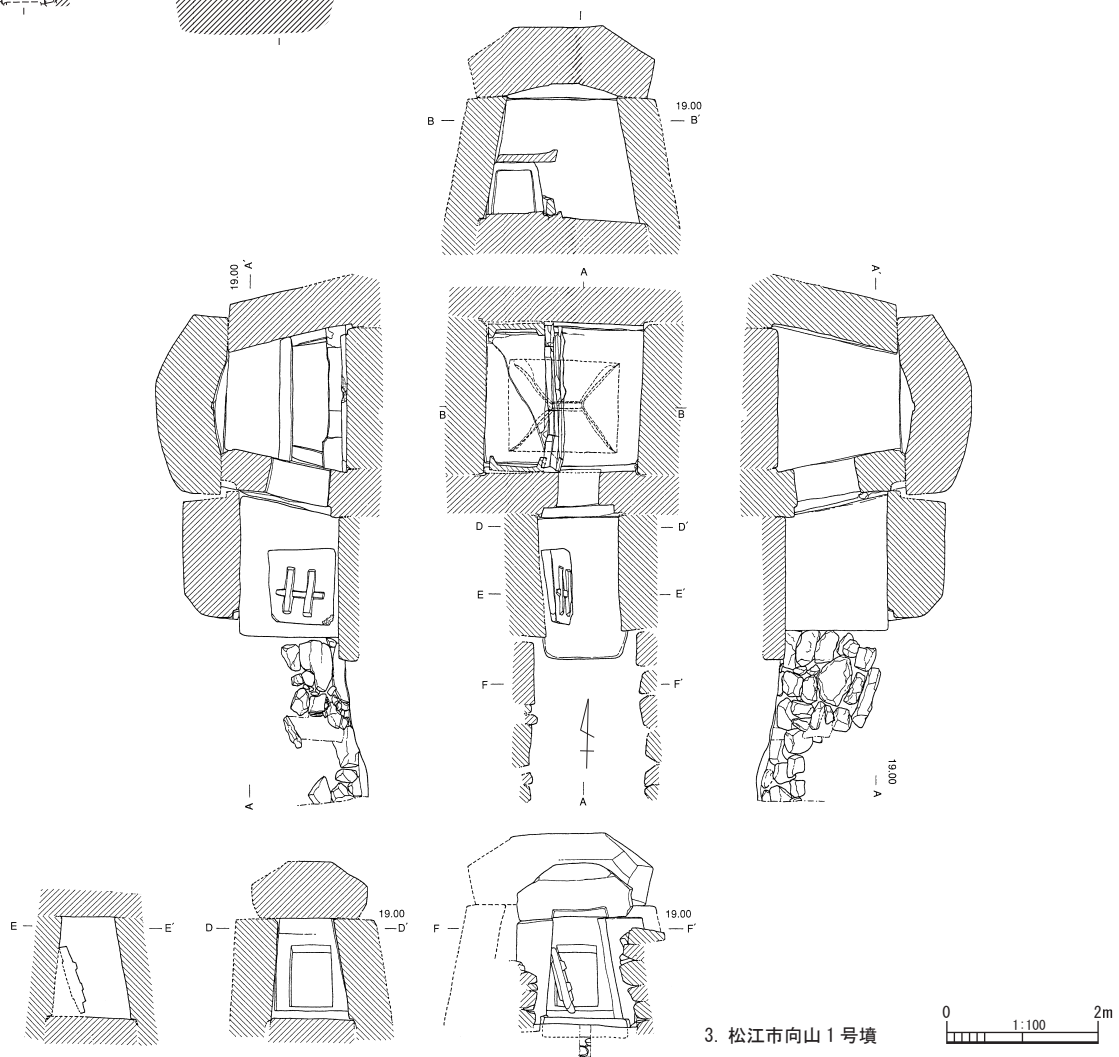
この「玄室＝棺」とする空間利用が古天神古墳にはじまることは、定型化した出雲型石棺式石室が出雲 4 期以降に増加するという時期的関係からもほぼ間違いない。つまり、古天神古墳例において考案された「玄室＝棺」とする空間利用こそ、出雲型石棺式石室の出現契機と評価できるであろう。したがって、石室空間の利用方法ひいてはそこに反映された葬送観念において、古天神古墳例と定型化した出雲型石棺式石室は前者が先行しつつ、同時に強い連続性をみとめうるのである。

古天神古墳の埋葬施設の特質 以上に述べたように、古天神古墳の石室は、外観上は天井石に縄掛突起をもつなど家形石棺を指向する点で定型化した出雲型石棺式石室と共通するが、構築過程や構造面には相違点が多く、むしろほかの横穴式石室とほぼ同じとみなすことができるのである。



1. 松江市古天神古墳

2. 松江市伊賀見1号墳



3. 松江市向山1号墳

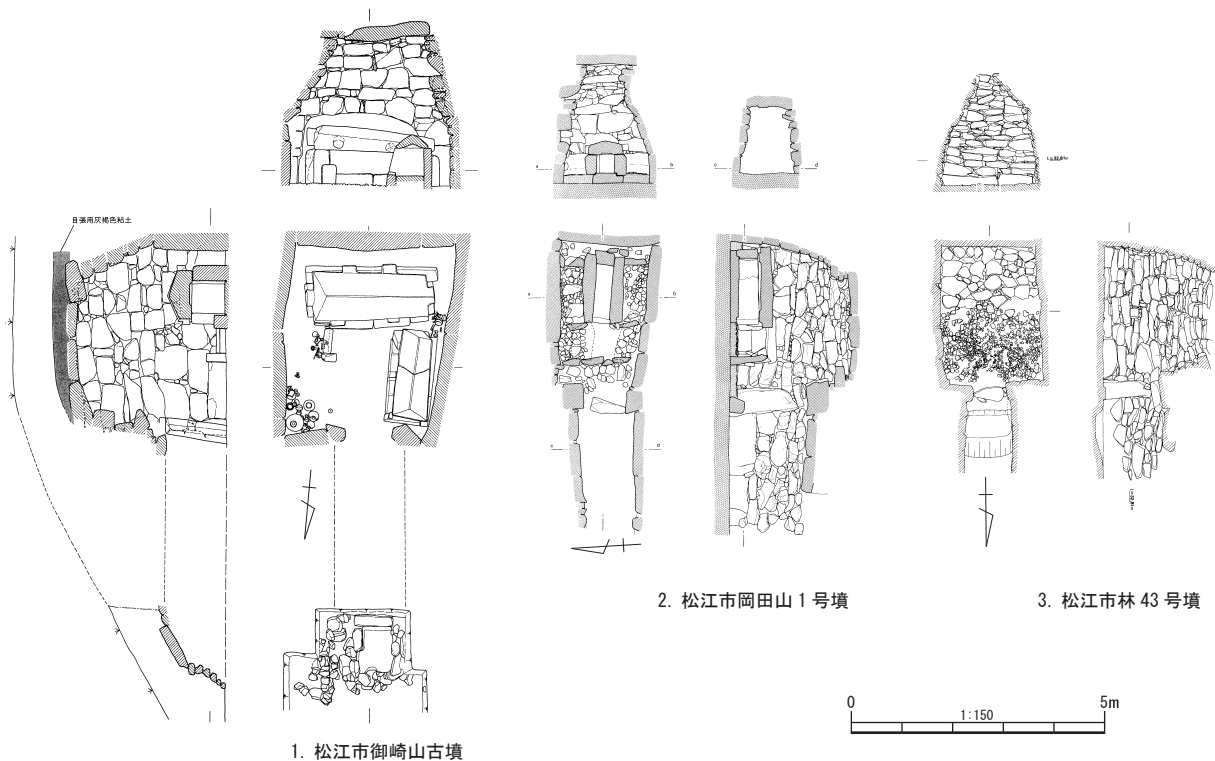
第46図 定型化前と定型化した出雲型石棺式石室

(3) 出雲型石棺式石室の構造の系譜

既往の評価とその問題点 先行研究において、出雲型石棺式石室の系譜は肥後とくに宇土半島基部を中心とした地域の横口式家形石棺に求められ、古天神古墳との直接的な関係を示す例として熊本県宇賀岳古墳がとりあげられた〔第52図-2、角田1993〕。しかし、宇賀岳古墳例と古天神古墳例にみる、①閉塞位置（前者の玄門、後者の羨門）、②玄門位置（前者の中央玄門、後者の片寄玄門）、③前壁構造（前者の独立した楣石、後者の羨道天井石を兼ねた楣構造）、④棺構造（前者の石屋形、後者の屍床仕切石）、⑤玄室平面形態（前者の縦長長方形、後者の横長長方形）、⑥天井石縄掛突起の有無（前者のなし、後者のあり）といった相違点からは、直接的な関係を想定するにはやや難があると考えられる。先行研究でもそうした相違点をふまえて、出雲型石棺式石室の出現に際して在地の主体性が顕在化したものと評価したが〔角田1993：91〕、主体性と直接的関係性を併存させる論理が準備されているわけではない。出雲東部の主体性が出雲型石棺式石室にうかがわれる背景についてもいま一步踏み込んだ議論が必要であると考えられる。

古天神古墳の石室の祖型 先にもふれたように、古天神古墳例は定型化した出雲型石棺式石室と外見上は共通するが構造面には大きな違いがあり、むしろそのほかの横穴式石室に近い。そこで、古天神古墳の石室の系譜を考えるにあたり、時空間的な位置づけに近い御崎山古墳の横穴式石室と比較してみよう（第47図-2）。

御崎山古墳例は、大小2基の平入り組合式家形石棺をおさめた横穴式石室である。玄室は2基の石棺の設置範囲に合致した規模であり、奥壁側に主軸に直交して大石棺を配置するため、幅が広めの長方形プランをもつ。平面形は縦長長方形ではあるが、中心埋葬である大石棺の横口が羨道と揃うように配置されている点も考慮すれば、玄室はおもに平入り空間として認識された可能性が高い。この御



第47図 出雲型石棺式石室に先行する北部九州系横穴式石室

崎山古墳例の空間利用のあり方は、古天神古墳例のそれと共通するところが大きいといえよう。

とすれば、御崎山古墳例を切石化しつつ、玄室を棺に見立てるという転換によって古天神古墳例が創出された可能性を考慮できる。ともに両袖型石室でありながら片寄玄門となる点〔田中 2014〕、さらに玄門位置の偏在が御崎山古墳例では大石棺の横口の位置と、古天神古墳例では屍床仕切石のU字形割り込みの位置とそれぞれ対応関係にある点も両者の空間利用の近似性をうかがわせる。

上記した論拠のみではやや飛躍した感が否めないが、その点は後述する系譜についての検討もあわせると整合的な理解が可能である。古天神古墳例が直接的には御崎山古墳例をモデルに石材を切石化したものとみて議論を進めることにしよう。

御崎山古墳の横穴式石室の系譜 それでは、古天神古墳例の祖型が御崎山古墳例であるとして、御崎山古墳例の系譜はどこに求められるのであろうか。

石室形態から、小田富士雄は福岡県桂川王塚古墳例に〔小田 1986〕、大谷晃二は福岡県日拝塚古墳や桂川王塚古墳、五郎山古墳などの北部九州型に〔柳沢 1990〕、角田徳幸は桂川王塚古墳との類似から中部九州に〔角田 2009〕、それぞれ御崎山古墳例の系譜を求める。なお、石室からではなく平入り横口式家形石棺から、肥後南部との関連性を想定する意見もある〔山崎 1985〕。

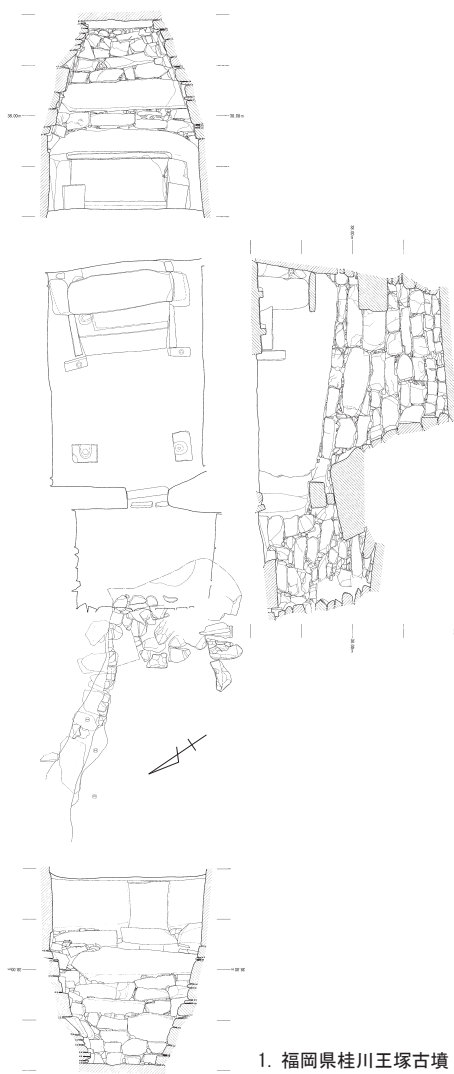
先行研究において系譜を考える際の鍵とされてきたのが、石室形態や石屋形の特徴が類似する桂川王塚古墳例である（第 48 図-1）。桂川王塚古墳の石屋形は肥後北部で製作され、石室は石棚に紀伊、大型腰石一石配置に肥後南部、玄室空間構造に肥後北・中部の要素をあわせもつ、多系統の要素を複合した北部九州における新形式と評価できるという〔柳沢 2003〕。また、桂川王塚古墳例は筑豊と肥後の有力集団と強いかわりを示すだけでなく、その後の北部九州の横穴式石室の展開において新機軸となるような存在と評価される〔重藤 1999、柳沢 2003〕。

あらためて御崎山古墳例をみると（第 47 図）、腰石の複数石配置や袖部構造、天井石の枚数に桂川王塚古墳例との顕著な差がある。御崎山古墳例と構造的に類似するのは出雲東部の岡田山 1 号墳であり、袖石の玄門立柱石上に側壁材が積まれるなど出雲東部の先行する横穴式石室との関連が強い（第 47 図）。これらの系譜を直接的に外部に求めうかは、山代二子塚古墳例をはじめとする同時期の大型古墳の実態が明らかでないため制約をとまうが、石室形態や空間の大きかなあり方は福岡県日拝塚古墳や佐賀県島田塚古墳などと近く、玄門付近の構造は島田塚古墳や福岡県東光寺剣塚古墳などと類似する（第 48 図）。岡田山 1 号墳例・御崎山古墳例・古天神古墳例の関係性が強いとみて複室構造をとらない点も考慮すれば⁽²⁾、北部九州において複室構造化が進展する以前の石室に系譜を求めうだろう。そして、その時期は須恵器型式でいう TK10 型式併行期（出雲 2 期併行）以前となる可能性が高い〔重藤 1999、柳沢 2003〕。したがって、築造時期が出雲 3 期にあたる岡田山 1 号墳例や御崎山古墳例の系譜は、出雲東部に先行して受容された北部九州系横穴式石室にあると考えられる⁽³⁾。

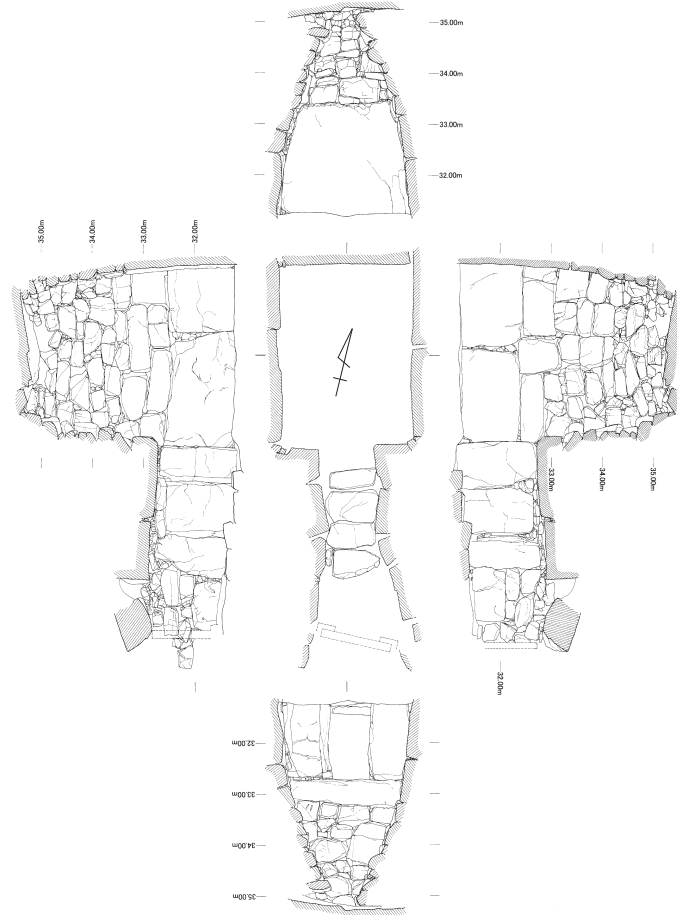
なお、石屋形は起源が肥後北部の菊池川流域にあるものの、TK10 型式併行期（出雲 2 期併行）には他地域に拡散し、それ以降は二次的に拡散した可能性が指摘されている〔藏富士 2009〕。御崎山古墳例も石屋形ではなく石棺であることから、二次的な拡散によるものとみてよいだろう。

小 結 古天神古墳例が直接的には御崎山古墳の横穴式石室をモデルに切石化するとともに、玄室を棺に見立てる空間利用を指向することによって創出された可能性を指摘した。さらに、御崎山古墳例の系譜は、北部九州でリアルタイムに展開した石室ではなく、出雲東部に先行して受容された北部九州系横穴式石室であるとみた。すなわち、出雲東部において受容された北部九州系横穴式石室が在地的展開を示す過程で、石室の切石化と葬送にたいする思想的転換が図られることによって、出雲型石棺式石室が創出されたと考える。

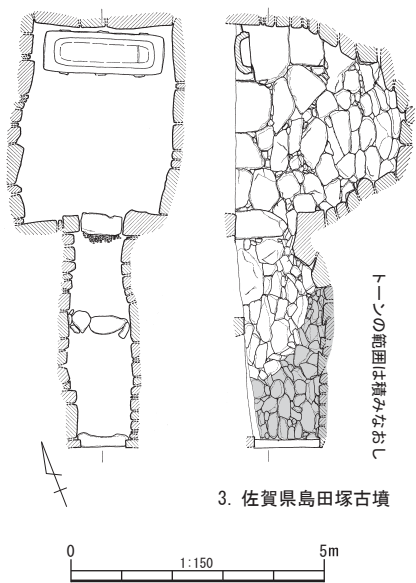
1 出雲型石棺式石室の成立 (岩本)



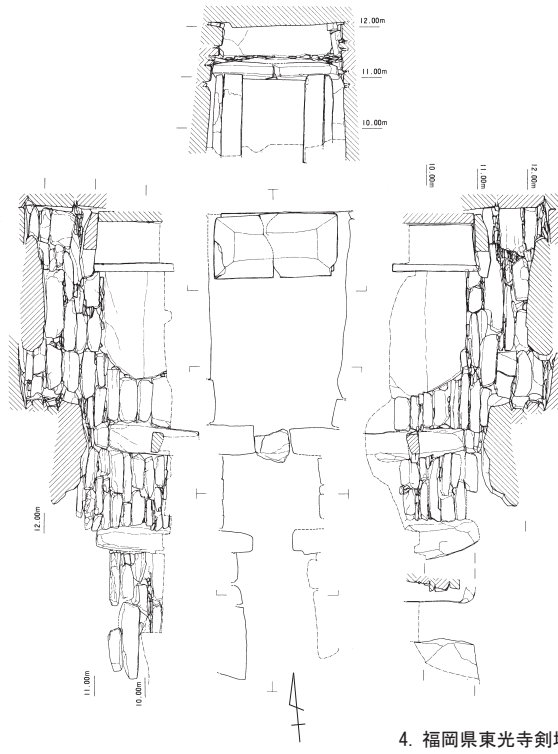
1. 福岡県桂川王塚古墳



2. 福岡県日拝塚古墳



3. 佐賀県島田塚古墳



4. 福岡県東光寺剣塚古墳

第 48 図 出雲東部に関連する北部九州系横穴式石室

(4) 出雲型石棺式石室の成立

これまでのところで、出雲型石棺式石室が先行して受容された横穴式石室を切石化することによって創出された可能性を述べた。以下では、切石技術が石室石材の加工に採用されるプロセスについて検討し、そのうえで出雲型石棺式石室の出現背景について考察を試みる。

① 山陰における横穴式石室の石材切石化の背景

石室切石化の時期 古天神古墳例を特徴づける一要素として、石室構築材に切石を使用する点がある。古天神古墳に先行する御崎山古墳では石室構築材は、石棺および閉塞用の板石をのぞけば大部分は自然石や割石である。したがって、出雲東部における横穴式石室構築材の完全な切石化は、現状では古天神古墳がもっとも早い⁽⁴⁾。石室への切石技術の導入によって、出雲型石棺式石室が出現したと考える所以である。その時期が須恵器でいう出雲3期末～4期初頭、TK43型式併行期新相～TK209型式併行期古相に比定しうるのは先述したとおりである。

出雲東部の周辺をみると、出雲西部においては今市大念寺古墳で玄室奥壁に凝灰岩の使用がはじまるが切石ではなく、つづく上塩冶築山古墳において石室の壁体に凝灰岩切石が採用される(第49図)。



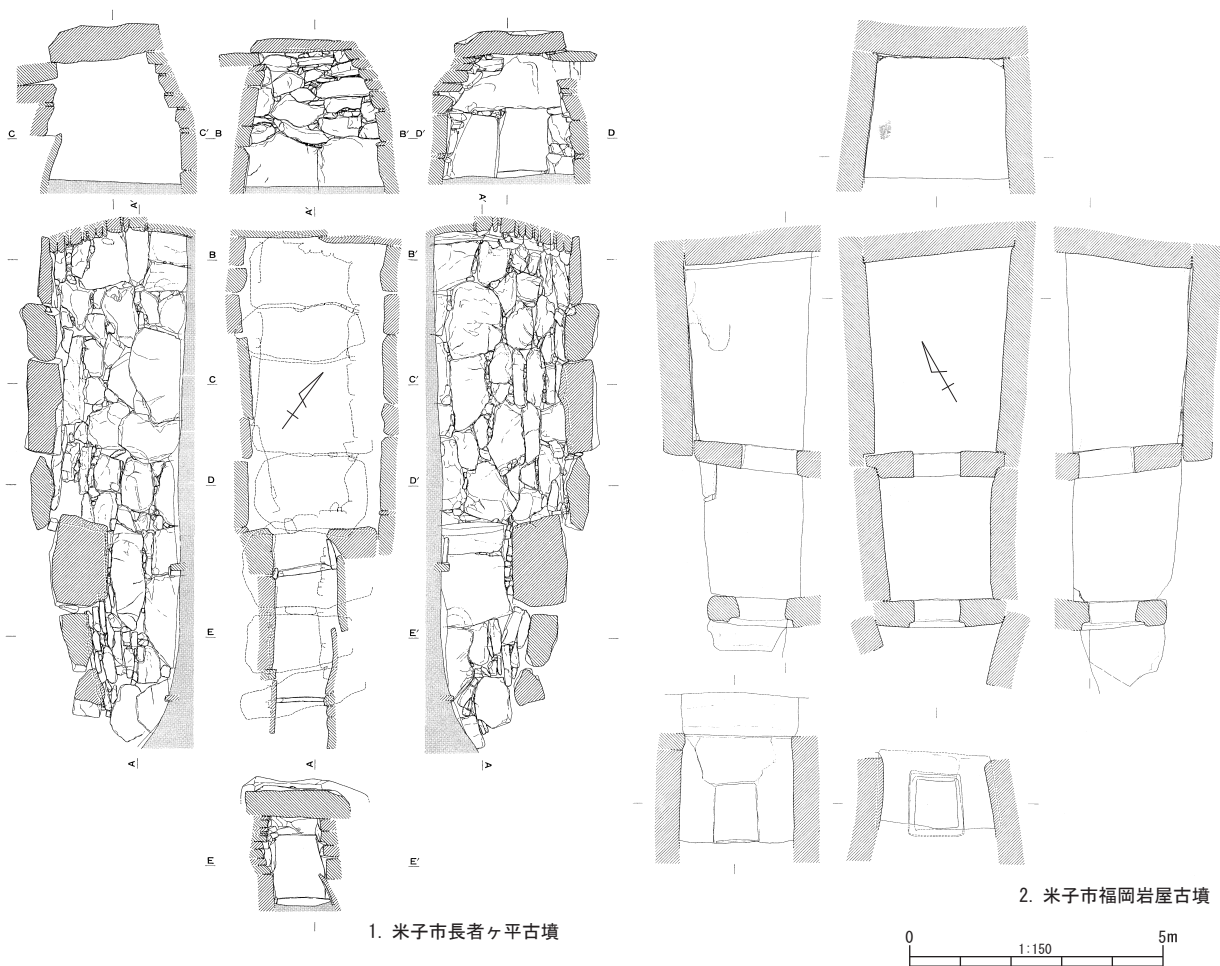
第49図 出雲西部における横穴式石室の切石化

その年代は、副葬品から大念寺古墳が TK43 型式併行期古相、上塩冶築山古墳が TK43 型式併行期新相と考えられる〔大谷 1999a・b〕。ただし、上塩冶築山古墳については、石室構造から出雲 4 期古相すなわち TK209 型式併行期古相とする見解もある〔坂本 2012〕。

さらに、伯耆西部の淀江平野では石室構築材として、長者ヶ平古墳が自然石・割石を、福岡岩屋古墳が切石を採用する (第 50 図)。長者ヶ平古墳は副葬品から TK10 型式に併行する時期〔中原・角田 1990〕、出雲型子持壺からは出雲 2 期～3 期古相併行期に築造されたとみられる〔池淵 2004〕。いっぽう、福岡岩屋古墳は須恵器や馬具、鉄鏃などから TK43～TK209 型式併行期に比定できる〔中原 1990〕。なお、長者ヶ平古墳・石馬谷古墳・福岡岩屋古墳から出土した円筒埴輪は、いずれも底部調整に円柱状工具による叩き技法を採用する同一系統に属し〔田中 2017〕、近接した時期の築造とみられる。石馬谷古墳は出土した須恵器から MT85 型式併行期とみられ、福岡岩屋古墳がもっとも後出する〔中原 1990〕。石馬谷古墳の埋葬施設の内容が不明だが、淀江平野においても TK43～TK209 型式併行期に横穴式石室構築材に切石が採用されるに至ったと考えられる。

以上に述べたように、石室構築材の切石化は、出雲東部・出雲西部・伯耆西部においてほぼ同時期、須恵器の時期表現でいうおおよそ TK43 型式併行期新相～TK209 型式併行期古相、出雲 3 期新相～4 期古相には達成されたと考えて差し支えないであろう。

石室切石化の背景 山陰における切石造横穴式石室の展開が出雲東部を起点とする既往の評価は〔山本 1964、中原 1996、角田 2009〕、切石造横穴式石室の数と分布密度はもちろん古天神古墳の年代



1. 米子市長者ヶ平古墳

2. 米子市福岡岩屋古墳

第 50 図 伯耆西部における横穴式石室の切石化

を古く見積もって出雲東部にいち早く導入された可能性をふまえた点にもとづく〔山本 1956、角田 1993〕。しかし、山陰における横穴式石室構築材の切石化がおおよそ同時期の運動とみてよければ、切石化に共通した背景を考えることも可能であろう。伯耆西部・出雲東部・出雲西部における同時期的な切石造横穴式石室の出現は、これら地域の首長間の緊密な連携⁽⁵⁾を想起させる。

ここで注目しておきたいのが、山陰諸地域において切石化の初源とみられる事例では、いずれも構築面において石棺式石室以外の横穴式石室の特徴がより強く顕在化する点である。上塩冶築山古墳例をはじめとする出雲西部では石材を切組積みにより壁体を構築しており、石室の形態や構造から大念寺古墳例を祖型として横穴式石室を切石化したものと判断できる。伯耆西部の福岡岩屋古墳例は出雲型石棺式石室の影響を受けたともされるが、複室構造を採用するのはむしろそれ以外の横穴式石室を指向するがゆえであろう。壁体の切組積みが前室で確認できる点もこの評価と矛盾せず、淀江平野と大山西北麓では多数の切石造横穴式石室が切組積みによって構築されている点とも調和する。同様に、出雲東部の古天神古墳例においても、前壁と側壁が切組積みによって構成される。屍床仕切石の存在も棺空間を画する玄室としての機能がより強く表出した結果であるといえよう。さらに、上記した切石造横穴式石室の初源例に特徴的にみとめられる石室構築技術としての切組積みについては、同じ技術が駆使された石室が確認されている肥後南部〔古城 2012〕に系譜を求めるのが妥当であろう(第 51・52 図)。この系譜にかんする理解は、刳抜玄門に着目した先行研究の指摘とも合致する〔角田 1993〕。さらにここで述べたように、石室石材の切石化を石室構築にかかわる技術体系としてとらえるのであれば、山陰における切石造横穴式石室の出現は、在来の石棺製作技術の延長線上にあるのではなく、他地域つまり肥後南部からの新技術の導入が直接的な契機であると評価できよう。

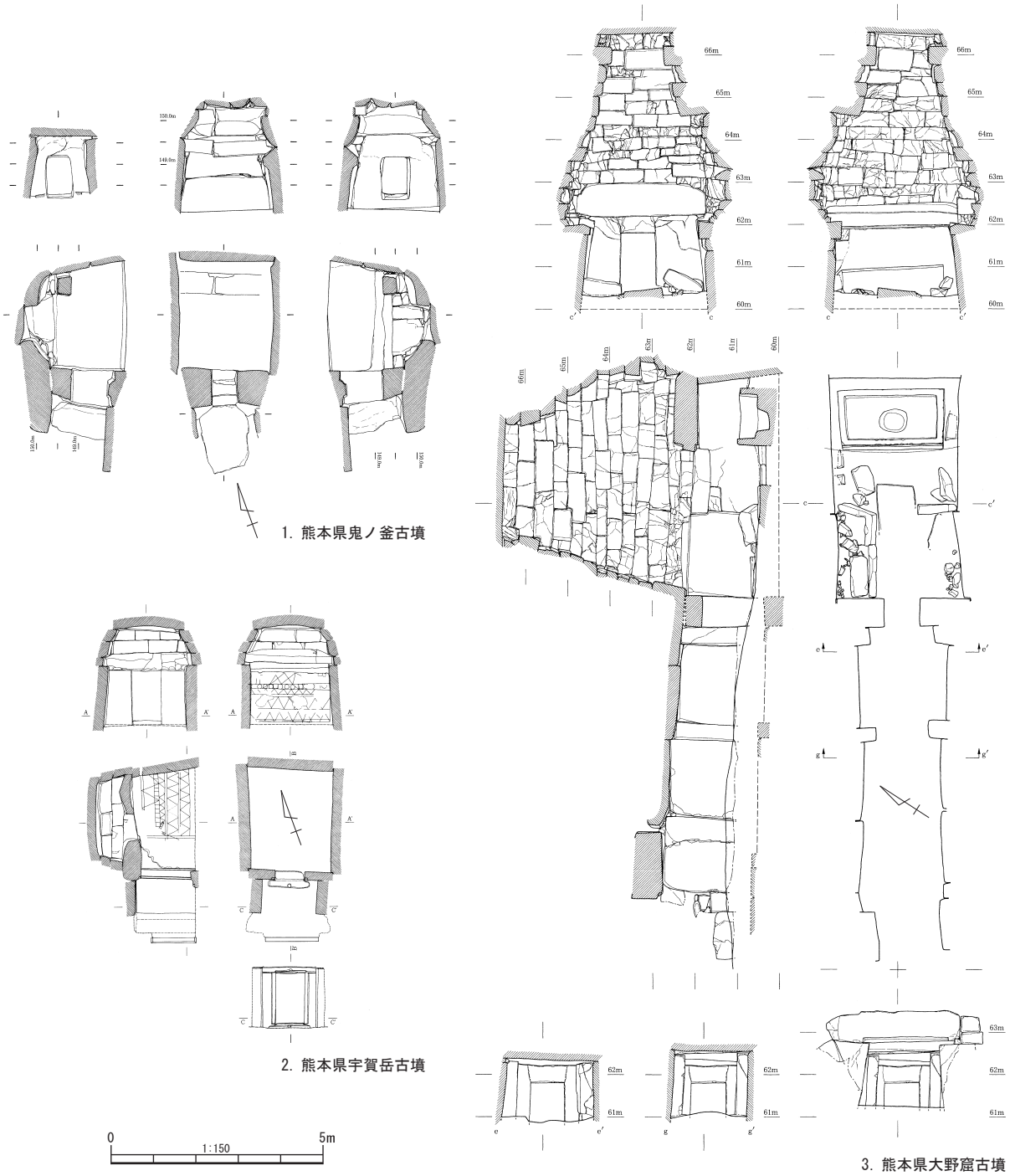
そして伯耆西部・出雲東部・出雲西部のなかでも、板状の巨石と刳抜玄門という以降の切石造横穴式石室に継承される肥後の諸要素を大型古墳にいち早く導入するのは伯耆西部の福岡岩屋古墳とみられる(第 50 図)⁽⁶⁾。玄門袖石と側壁の構造的特徴や複室構造、中央玄門などの特徴も、もっとも肥後南部との共通性が高い(第 52 図)。また、切石化の前後で石室構造にも大きな違いがみとめられる。そうした状況からは、山陰のなかでも伯耆西部の切石造横穴式石室が肥後からの影響を直接的に受容した公算が高い。その点を積極的に評価すれば、山陰における横穴式石室石材の切石化に、伯耆西部が中核的な位置を占めたと考えることも可能であろう。この見方は福岡岩屋古墳に時空間的にも近い石馬谷古墳から本州唯一の馬形石製表飾が出土していることとも関連し〔梅原 1924、柳沢 1987〕、その築造時期と想定される MT85 型式併行期を下限としてそれ以降、伯耆西部が九州諸勢力との交渉によって、複数次におよび石材加工技術の受容主体となった可能性を示す点で重要である⁽⁷⁾。

ただし、石材加工技術の受容主体が伯耆西部であったとしても、そのことがそのまま背景となる社会関係の形成を主導したことに結びつくわけではないと考える。前後の一定期間も含めた首長墓の動向を考慮すると、首長墓の規模と数が卓越する出雲東部が山陰における首長間連携を主導した可能性



第 51 図 山陰の導入期切石造横穴式石室にみる切組積み
(1. 古天神古墳玄室 2. 上塩冶築山古墳玄室 3. 福岡岩屋古墳前室)

1 出雲型石棺式石室の成立 (岩本)



第52図 肥後南部の切石造横穴式石室

が高いとみるのが妥当であろう。とすれば、出雲東部はあえて肥後南部の諸要素をそのまま受容することなく、独自の改変を加えて出雲型石棺式石室を創出したことになる。そこには、古墳築造にたいする指向性の地域的な違いを読み取ることができよう。少なくとも、出雲東部では横穴式石室の切石化は中小古墳で先行し、伯耆西部と出雲西部では大型古墳にはじまることから、出雲東部は伯耆西部や出雲西部より新形式の石室の採用にたいして保守的な姿勢を示したと評価できる。

山陰における横穴式石室の切石化は、伯耆西部が新技術導入の直接的な受容主体であった可能性が高く、同時に、出雲東部が主導した伯耆西部・出雲西部との首長間の緊密な連携によってほぼ同時期に達成されたと考える。その背景には、九州諸勢力の動向が密接にかかわっていたと推測される。

② 出雲型石棺式石室の出現背景

出雲型石棺式石室の出現と二つの背景 以上の検討から、出雲型石棺式石室の出現に至るまでには大きく二つの史的背景が浮かび上がる。第一の背景は出雲東部に先行して受容された横穴式石室にかかわる北部九州との関係であり、第二の背景が伯耆西部・出雲東部・出雲西部の首長間連携と伯耆西部を介した肥後南部との交渉である。出雲型石棺式石室は、第一の背景を契機とした墓制の受容を基礎に、第二の背景にもなって導入した新技術を融合させることによって創出されたといえる。時期的には、第一の背景がTK10型式併行期（出雲2期）以前、第二の背景がTK43型式併行期新相（出雲3期新相）ごろとなる（第53図）。

注目すべきは、第一と第二の背景が引き起こした変化に質的な違いがみられる点である。第一の背景によって北部九州から受容された埋葬方式は、少なくとも出雲東部では第二の背景に至るまでのあいだ、変容しながらも構造的な特徴がほぼ維持される。また極端な例だが、この時期の出雲東部には薄井原古墳の畿内型横穴式石室も確認されており、墓制に東西双方向への交流が反映されている。それにたいし、第二の背景は出雲型石棺式石室の出現と定型化にうかがわれるように、その後の墓制の地域的まとまりを形成する契機となるものである。二つの背景が出雲東部にもたらした社会変化には質的な違いがあり、そこには脈動する列島社会の情勢が反映されていると想像できよう。

さらに、第一の背景と第二の背景のあいだには九州諸勢力との広域交流に断絶をみとめうる点もみのがせない。第一の背景で受容した北部九州系横穴石室は、第二の背景まで新たな外的要素を摂取することなく出雲東部で展開する。北部九州でみられる複室構造化が同時期の出雲東部で確認されないのは、北部九州との広域交流が断絶した可能性を示唆する。安易に文献記載と重ねることには慎重を期すべきだが、この断絶こそ「筑紫君磐井の乱」直後の北部九州との関係を反映しているのではなかろうか。とすれば、第一の背景を北部九州勢力の広域におよぶ活発な交流の産物とみて、第二の背景を該期に九州最大規模を誇る大野窟古墳の存在から肥後南部勢力主導の広域交流によるもの、さらには「屯倉」設置記事以降の動向としてそこに倭王権の関与すら想定することも不可能ではない。推測の域を出ないところもあるが、出雲型石棺式石室の出現・展開のプロセスにみる強いまとまりの形成・維持には、それ以前にはない社会動向の変化や画期を想定すべきであると考えられる。



第53図 出雲型石棺式石室成立の二つの背景〔概念図〕

「見せる石室」としての出雲型石棺式石室 くり返し述べるが、古天神古墳例は石室構築技術において定型化した出雲型石棺式石室とは一線を画する。石材を積み上げて側壁や前壁を構築する点は、通常の横穴式石室を切石化したものと評価するのがふさわしい。これにたいし、古天神古墳例と定型化した出雲型石棺式石室のつながりの強さは、「見せる石室」として家形石棺を表象した外観、さらには「玄室＝棺」とする空間利用の同一性にうかがわれ、その萌芽は古天神古墳例にある。この点において古天神古墳例は、出雲型石棺式石室のプロトタイプとする見方が適切であるといえよう。

横穴式石室構築石材の切石化にあたって、山陰においても出雲東部だけが家形石棺を表象した外観を採用したのは、周辺地域との技術的な共通点や導入にあたっての背景もふまえるならば、在地の指向性によるところが大であったと考えることになる。東西出雲では石室用材の切石化にわずかに先行して平入り横口式家形石棺が採用されること、くわえて出雲東部においては「開かれた棺」〔和田1986〕としての組合式家形石棺が卓越することが、出雲型石棺式石室の出現背景に大きく影響をおよぼしたと考える。伯耆西部・出雲東部・出雲西部の首長間の連携によって導入された新たな石材加工技術と平入り横口式家形石棺というデザイン、さらには九州系横穴式石室の「玄室＝棺」とする空間利用を出雲東部において独自に融合させることによって、「見せる石室」⁽⁸⁾としての出雲型石棺式石室が成立したと評価したい。

おわりに

本稿では、出雲型石棺式石室の出現を構造的特徴の共通性から肥後との直接的な影響によるものとする先行研究の理解にたいし、横穴式石室への切石技術の導入という視点から再検討を試みた。その結果、出現期の出雲型石棺式石室である古天神古墳の石室を、家形石棺の外観と機能を付与するために、先行して北部九州から受容された横穴式石室と平入り組合式家形石棺を切石技術によって融合したものと評価した。またその背景には、先行研究が指摘した肥後から出雲東部への直接的影響ではなく、肥後南部と伯耆西部の首長間の直接的関係を介した可能性、さらには出雲東部が主導した伯耆西部・出雲西部との首長間連携の強化を想定した。

切石造横穴式石室が出雲東部・出雲西部・伯耆西部においてほぼ同時期に出現するなかで、出雲型石棺式石室に顕在化した出雲東部の「玄室＝棺」とする指向性は、在地独自の適応と評価できる。さらに、その適応を促した主体性の強さは、出現からさほど時間をおくことなく出雲型石棺式石室が定型化し、首長墓の墓制として共有・維持される点にも鮮明に映し出されているといえよう。

出雲東部の墓制として出雲型石棺式石室が共有・維持されるまでに出現と定型化の二段階がみとめられるところには、導入した技術を応用するプロセスがあらわれている。それは、先行研究が想定した受容に際しての変容とは異なる保守性を帯びた適応の過程ともいえる。そこには、この時期に主体性を強める出雲東部が、広域交流という外向きの秩序よりも、在地社会という内向きの秩序形成を重視していた可能性がうかがわれる。広域関係構築のシンボルともいえる前方後円墳だけでなく、前方後方墳を採用・再生産した背景はそうした出雲東部に根づく指向性とも無関係ではなかろう。その意味で、出雲型石棺式石室の出現は出雲東部がもつ指向性の一つの到達点と評価できるであろう。

古墳時代後期から終末期にかけての地域社会の議論では、地域内部の多様な差異を階層制と関連づけて理解しようとする傾向が強い。しかし、こと出雲東部においては、出雲型石棺式石室の出現以前と以後では地域社会の編成や秩序の形成に大きな違いのあることを強調できる。出雲型石棺式石室の出現には、地域社会としての出雲東部の秩序形成における画期をみいだすことができるとともに、九州とも畿内とも一定の距離を置いた出雲の主体性が垣間みえよう。

謝 辞

本稿執筆に際し、大谷晃二氏、田中大氏、磯貝龍志氏、岩本真実氏にはさまざまな場面で議論の相手となっていた。また、論点の重要な部分には、和田晴吾先生との対話のなかで着想を得たところもある。

末筆ながら記して感謝申し上げたい。

註

- (1) なお、壁面を複数段構成とする例に、朝酌岩屋古墳の奥壁と朝酌小学校校庭古墳の側壁がある。とくに朝酌岩屋古墳は前壁も刳抜玄門ではない点から、古天神古墳と同様に出雲型石棺式石室の定型化に先立つ例として位置づけられよう。
- (2) 御崎山古墳にみる玄室袖部付近への土器副葬は日拝塚古墳でも確認されており、複室化に先立つ北部九州の特徴〔重藤 1999〕とされることとも整合的である。なお、御崎山古墳例の玄室より外側の構造が不明であるため単室構造と確定できないが、土器の副葬状況からは単室構造である可能性が推測される。
- (3) 出雲西部の大念寺古墳では複室構造の横穴式石室を採用しており、出雲東部とは受容した石室の系譜や時期が異なる可能性がある。とくに、北部九州において複室構造が出現する TK10 型式併行期には〔重藤 1999、柳沢 2003〕、前室空間を埋葬空間とする事例は管見にのぼらない。北部九州では前室を土器の副葬空間として使用する〔重藤 1999〕。屍床などから前室を埋葬空間とする確実な九州の事例は肥後にあるが、その時期は TK209 型式併行期以降とみられる。こうしたことから、大念寺古墳の石室の系譜を追究することは、該期における出雲西部をめぐる広域交流の実態に迫るうえできわめて重要な課題といえよう。ただ、少なくとも出雲東部と出雲西部とでは、広域交流にたいする首長層がもつ指向性に差があった可能性を指摘できる。
- (4) なお、出雲東部において古天神古墳に先行して横穴式石室に切石材が使用された可能性がある例に、手間古墳がある。手間古墳では埋葬施設の推定地点から、70cm×40cm大の凝灰岩が出土しており、写真図版からもチョウナ削り技法によって切石に加工された面を確認できる。しかも、肉眼観察では石材は荒島石と推定され、石室の壁体となる可能性が高いという〔渡辺(編) 2002〕。しかし、切石材と報告された石材が1点のみであるため、出土した1点の石材をもって手間古墳の横穴式石室が切石造横穴式石室であったとするには不安が残る。むしろ荒島石であることが確実視されるならば、大型の石棺材などを想定するのが移動をとともう石材の利用実態からは妥当であるように思う。出雲東部の首長墓における埋葬施設の傾向からみても、切石造横穴式石室への転換は古天神古墳において達成されたとみるのが現状の資料に即していると理解する。いずれにせよ、手間古墳の築造時期が出雲3期でも新相を示す点は、山陰における切石造横穴式石室の導入を TK43 型式併行期新相～TK209 型式併行期古相、出雲3期新相～4期古相には達成されたとする本論の理解と矛盾するわけではない。
- (5) この理解は、田中大の指摘する当該期における円筒埴輪の製作系統が統合される動向〔田中 2017〕とも整合的であると考えられる。出雲東部・出雲西部・伯耆西部の首長層がそれぞれ個別に切石技術の受容主体となった可能性も否定できないが、埴輪製作において出雲東部の東淵寺古墳と出雲西部の上塩冶築山古墳に同工品が存在する点も考慮すれば〔池淵 2017〕、墳墓築造において緊密な連携をとっていたと理解するのがより妥当性が高いと考える。
- (6) 福岡岩屋古墳の石室は肥後南部の石室の穹窿状天井を省略した形式とみられる。この上部構造の省略は、坂本豊治が指摘する内容とは異なり〔坂本 2013〕、むしろ小林行雄が洞察した家形石棺にみる畿内の箱形指向と九州の家形指向の対比〔小林 1951〕でみた際の前者の指向性による影響が考えられる。上部構造の省略を考慮したうえで構造や形態を比べると、福岡岩屋古墳と大野窟古墳の石室には類似性をみいだすこともできる。
- (7) なお、石馬谷古墳で確認された馬形石製表飾がほかに福岡県岩戸山古墳でしか確認されない点は、伯耆西部と筑後中部あるいは有明海沿岸諸地域との関係の強さを示すと考える〔柳沢 1987〕。ただし、それが石室切石化の直接的な背景であったかは、石馬谷古墳の埋葬施設の内容が不明であるため決めがたい。そのうえで筆者は現時点での状況証拠として時期差を積極的に評価し、石馬谷古墳における石製表飾を後述する第一

1 出雲型石棺式石室の成立 (岩本)

の背景にともなうものとみて、伯耆西部が早い段階に筑後中部あるいは有明海沿岸諸地域との交渉を主導した可能性を考えたい。石馬谷古墳の築造年代はMT85型式併行期と第一の背景の時期より遅れるが、石製表飾の製作時期については古墳の築造年代に少し先行する可能性を想定しておきたい。伯耆西部が継続的に石材加工技術の受容したとする所以である。

- (8)「見せる石室」としての出雲型石棺式石室に関連して重要であるのが、石棺式石室の築造にかかわる一次墳丘の段階の、石棺式石室の天井石が見える段階での出雲型子持壺をもちいた儀礼である〔角田 2005〕。ただし、出雲型子持壺を用いた石棺式石室の儀礼は、定型化前の古天神古墳では確認できないことから、石室の定型化にともなって儀礼も定式化したものとみておきたい。

引用文献

- 赤沢秀則・広江耕史 1987「石棺式石室の構造と変遷」『石棺式石室の研究—出雲地方を中心とする切石造り横穴式石室の検討—』古代の出雲を考える6 出雲考古学研究会 pp.215-229
- 池淵俊一 2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—』河瀬正利先生退官記念事業会 pp.497-516
- 池淵俊一 2017「松江市東淵寺古墳の埴輪について(補遺)」『古代文化研究』No.25 鳥根県古代文化センター pp.17-45
- 出雲考古学研究会 1987「石棺式石室の構造と変遷」『石棺式石室の研究—出雲地方を中心とする切石造り横穴式石室の検討—』古代の出雲を考える6
- 出雲市教育委員会(編) 1988『史跡今市大念寺古墳保存修理事業報告書』
- 今田治代(編) 2012『大野窟古墳発掘調査報告書』氷川町文化財調査報告書第2集 熊本県氷川町教育委員会
- 岩本 崇 2018「第5章 総括」『古天神古墳の研究』鳥根大学考古学研究室調査報告第17冊 鳥根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会 pp.131-136
- 岩本真実 2018「古天神古墳出土須恵器の編年的位置づけ」『古天神古墳の研究』鳥根大学考古学研究室調査報告第17冊 鳥根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会 pp.111-122
- 梅原末治 1918「出雲における特殊古墳(上)」『考古学雑誌』第9巻第3号 日本考古学会 pp.8-21
- 梅原末治 1924「石馬谷の古墳と其の石馬」『因伯二国における古墳の調査』鳥取県史蹟勝地調査報告第2冊 鳥取県 pp.10-13
- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥根考古学会誌』第11集 鳥根考古学会 pp.39-82
- 大谷晃二 1995「出雲の古墳時代後期の切石石棺」『古墳時代後期の棺—一家形石棺を中心に—』第23回山陰考古学研究集会 pp.17-22
- 大谷晃二 1996「第4章 総括」『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ 鳥根県教育委員会・鳥根県立八雲立つ風土記の丘 pp.63-74
- 大谷晃二(編) 1996『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ 鳥根県教育委員会・鳥根県立八雲立つ風土記の丘
- 大谷晃二 1999a「第5節 上塩冶築山古墳の時期」『上塩冶築山古墳の研究』鳥根県古代文化センター調査研究報告書4 鳥根県古代文化センター pp.170-178
- 大谷晃二 1999b「第6節 上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』鳥根県古代文化センター調査研究報告書4 鳥根県古代文化センター pp.179-193
- 小田富士雄 1986「鳥根県の九州系初期横穴式石室再考」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集 山本清先生喜寿記念論集刊行会 pp.301-319
- 角田徳幸 1993「石棺式石室の系譜」『鳥根考古学会誌』第10集 鳥根考古学会 pp.69-103
- 角田徳幸 2005「出雲における後期古墳の墳丘構造」『鳥根考古学会誌』第22集 鳥根考古学会 pp.37-52
- 角田徳幸 2008「出雲の石棺式石室」『古墳時代の実像』吉川弘文館 pp.72-107
- 角田徳幸 2009「山陰における九州系横穴式石室の様相」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会 2007年度熊本大会分科会I記録集 北九州中国書店 pp.47-72

- 角田徳幸・西尾克己 1989「出雲西部における後期古墳文化の検討—横穴式石室の構造と変遷を中心として—」『松江考古』第7号 松江考古談話会 pp.5-42
- 勝部 衛 1986「八束郡玉湯町林古墳群第43号古墳の調査」『八雲立つ風土記の丘』No.79 鳥根県立八雲立つ風土記の丘 pp.2-5
- 金山正樹（編）1998『向山古墳群発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第77集 松江市教育委員会
- 唐津湾周辺遺跡調査会 1982『末盧国』〔本文篇〕六興出版
- 藏富士寛 1997「石屋形考—平入横口式石棺の出現とその意義—」『先史学・考古学論究』Ⅱ 熊本大学文学部考古学研究室創設25周年記念論文集 熊本大学文学部考古学研究室 pp.133-166
- 藏富士寛 2009「九州地域の横穴式石室」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会2007年度熊本大会分科会Ⅰ記録集 北九州中国書店 pp.3-20
- 小林行雄 1951「家形石棺（上）・（下）」『古代学研究』第4・5号 古代学研究会 pp.2-15・9-17
- 坂本豊治 2012「横穴式石室の玄門構造からみた中村1号墳」『中村1号墳』本文編 出雲市の文化財報告15 出雲市教育委員会 pp.233-256
- 坂本豊治 2013「山陰—横穴式石室の導入と展開—」『横穴式石室の導入と展開』中国四国前方後円墳研究会第16回研究集会 pp.5-12
- 重藤輝行 1999「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開』第Ⅱ分冊 第2回九州前方後円墳研究会 pp.659-693
- 勢田廣行 1984「宇賀岳古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会 pp.101-104
- 田中 大 2014「〔出雲型〕石棺式石室における片寄り玄門の系譜と性格」『国家形成期の首長権と地域社会構造』第1回客員検討会発表資料 鳥根県古代文化センター
- 田中 大 2017「出雲・伯耆西部における古墳時代後期後半の異系統円筒埴輪の融合」『考古学研究』第64巻第2号 考古学研究会 pp.82-98
- 中原 斉 1990「西伯耆首長墓の動向と向山古墳群の意義」『向山古墳群』淀江町埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 鳥取県淀江町教育委員会 pp.136-150
- 中原 斉 1996「伯耆西部の横穴式石室」『山陰の横穴式石室—地域性と編年の再検討—』第24回山陰考古学研究集会 山陰考古学研究会 pp.16-19
- 中原 斉・角田徳幸 1990「鳥取県・長者ヶ平古墳の研究」『鳥根考古学会誌』第7集 鳥根考古学会 pp.1-41
- 長谷川清之ほか 1994『国指定史跡 王塚古墳—発掘調査及び保存整備報告—』桂川町文化財調査報告書第13集 桂川町教育委員会
- 藤江 望・藤木 聡（編）1998「Ⅲ 肥後における古墳の調査3」『考古学研究室報告』第34集 熊本大学文学部考古学研究室
- 古城史雄 2012「横穴式石室からみた大野窟古墳」『大野窟古墳発掘調査報告書』氷川町文化財調査報告書第2集 熊本県氷川町教育委員会 pp.120-134
- 松本岩雄（編）1987『出雲岡田山古墳』鳥根県教育委員会
- 松本岩雄（編）1999『上塩冶築山古墳の研究』鳥根県古代文化センター調査研究報告書4 鳥根県古代文化センター
- 丸山康晴 2007「13日拝塚古墳 災害復旧工事」『春日市埋蔵文化財年報』14 平成17年度 春日市教育委員会 pp.28-34
- 柳沢一男 1987「石製装飾考」『東アジアの歴史と考古』下 岡崎敬先生退官記念論集 岡崎敬先生退官記念事業会 pp.170-222
- 柳沢一男 1990「横穴式石室からみた地域間動向・近畿と九州」『横穴式石室を考える—近畿の横穴式石室とその系譜—』帝塚山考古学研究所 pp.75-92
- 柳沢一男 2003「複室構造横穴式石室の形成過程」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集 大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会 pp.471-486

1 出雲型石棺式石室の成立 (岩本)

山崎信二 1985『横穴式石室構造の地域別比較研究一中・四国編一』

山本 清 1956「須恵器より見たる出雲地方石棺式石室の時期について」『島根大学論集 (人文科学)』第6集
島根大学 pp.114-125

山本 清 1964「古墳の地域的特色とその交渉—山陰の石棺式石室を中心として—」『山陰文化研究紀要』第5
号 島根大学 pp.43-73

吉留秀敏 (編) 1991『東光寺剣塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第267集 福岡市教育委員会

渡辺貞幸 (編) 2002『松江市手間古墳発掘調査報告・薬師山古墳出土遺物について』島根大学考古学研究室調
査報告第3冊 島根大学法文学部考古学研究室

和田晴吾 1986「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元6 講談社 pp.105-119

挿図出典

第46図：1.古天神古墳〔本書〕、2.伊賀見1号墳〔角田1993：p.71 第3図〕、3.向山1号墳〔金山(編)
1998：pp.35-36 第17図〕。

第47図：1.御崎山古墳〔大谷(編)1996：p.14 第5図〕、2.岡田山1号墳〔松本(編)1987：図版5〕、3.林
43号墳〔勝部1986：p.5 図3〕。

第48図：1.桂川王塚古墳〔長谷川ほか1994：付図〕、2.日拝塚古墳〔丸山2007：p.31 掲載図〕、3.島田塚古墳
〔唐津湾周辺遺跡調査会1982：p.508 第242図〕、4.東光寺剣塚古墳〔吉留(編)1991：図15〕。

第49図：1.大念寺古墳〔出雲市教育委員会(編)1988：p.2 図3〕、2.上塩冶築山古墳〔松本(編)1999：
pp.25-26 第17図〕。

第50図：1.長者ヶ平古墳〔中原・角田1990：pp.11-12 第7図〕、2.福岡岩屋古墳〔出雲考古学研究会1987：
pp.157-158 第102図〕。

第51図：岩本撮影。

第52図：1.鬼ノ釜古墳〔藤江・藤木(編)1998：p.3 第3図〕、2.宇賀岳古墳〔勢田1984：p.103 36-4 図〕、3.大
野窟古墳〔今田(編)2012：pp.53-54 第27図〕。

第53図：岩本作成。